

「〇〇原理主義」を越えて



学長
成田 健一

新しい年を迎え、コロナ禍が始まって間もなく2年が過ぎようとしています。この稿をしたためている11月末現在、日本は人口100万人以上の国で、直近7日間の人口あたり感染者が中国を除くと最少、という幸運の中にいます。一方で、欧州は日本の約千倍を数えるドイツをはじめ感染が急拡大しています。

昨年は、アフガニスタンでイスラム原理主義勢力が政権を把握、EUでは今も難民問題に揺れています。また、華夷秩序の樹立を目論む大国の動きに、世界の国々は翻弄されつつあります。そんな激動の時代にもかかわらず、日本ではコロナ対策の給付金といったポピュリズム的な報道ばかりが目につきます。コロナ禍

は、DXの遅れをはじめ、日本社会に喰食う様々な現実を暴き出した、そんな感を強くした1年でした。

インターネットの普及は情報格差をなくし、民主的で多様な社会を招くと喧伝されましたが、確証バイアスによるエコーチェンバーとフィルターバブルに多くの人が陥り、寛容性が益々失われ、同調圧力とも相まって、社会が色々な意味で「原理主義」に染まりつつある気がします。例えば、SDGsというのは本来、複雑な社会問題に対して総合的な視点で解決策を考えるというのが主旨であるはずなのに、「環境原理主義」と揶揄されるバランスの欠いた議論が跋扈しつつあります。まさに正義という名の「思考停止」状態です。

私たちが目指すべき「豊かな社会」とは何か、もう一度考える必要があります。本学は、建学の精神・理念に基づく教育目的として「人々の幸福のために自ら考え行動することができる」ことを謳っています。その実現に向けて、教学マネジメントをどう具現化していくのか、大学構成員一人ひとりの俯瞰力・洞察力が、あらためて問われています。

今春、いよいよデータサイエンス学科がスタートします。これからの社会で広範に実装されていくAIも、教師データとして何を学ばせるかで答えは変わってきます。真に人々の幸福に寄与するデータ活用教育を展開できるか、本学のあらたな実工学教育へのチャレンジが始まります。